

小中の接続を踏まえた英語教育の在り方

～ 笠原型コンテンツ・ベイストの手法を用いて～

本校の英語活動の取組の紹介

学校名	多治見市立笠原小学校
実施状況(学年・回数)	第1・2学年：英語活動（E学習）を週1回45分で実施 第3～6学年：英語活動（E学習）を週2回45分で実施 週2回朝活動の15分でE活動を実施
年間時数	E学習として第1・2学年35時間，第3学年60時間，第4学年65時間， 第5・6学年70時間
指導体制	E学習：HRTとALTによるTT指導 E活動：JTEによる全校放送とHRTによる指導 (HRT＝学級担任 ALT＝外国語指導助手 JTE＝日本人の英語担当教員)
その他	文部科学省指定「研究開発学校」(H15～H20) 文部科学省指定「英語教育改善のための調査研究事業」調査研究学校(H21～)

1 前年度までの実践について

- ・児童が「話したい」「聞きたい」と思う課題と内容をもつ題材（笠原型コンテンツ・ベイストの手法）について学年の実態に合うように検討，工夫改善しながら取り組んできた。
- ・高学年では，初めて触れる語彙や表現をできるだけ少なくし，既習で汎用性の高い語彙や表現を選ぶことによって，無理なく，たくさんの英語を話せる活動を目指した。

笠原型コンテンツ・ベイストの手法とは

- ・他教科の学習内容を素材とした英語活動
- ・気付きや発見を大切にした学習
- ・「聞く」「話す」を中核にした学習
- ・内容を伝え合うための必然を重視した問題解決的な活動

2 英語活動を通して目指す姿

(1) 英語活動を通して願う児童の姿

- ・相手の思いや考えを積極的に理解しようとし，自分の思いや考えを進んで伝えようとする姿
- ・身近で簡単な事柄について，英語の文字や音声，身振りや具体物等を用いて伝え合う姿

(2) 第5学年までの児童の姿

- ・アンケートの結果から，90％の児童が英語活動を「とても楽しい」「楽しい」と感じている。
- ・「話せるようになりたい」「聞いて分かるようになりたい」「書けるようになりたい」という前向きな意識をもっている児童が多い。

3 本年度の重点実践内容

児童の実態にそった年間指導計画と英語表現の系統性，付けたい力の見直し

「聞く」「話す」活動だけでなく，「読む」「書く」活動も含めた，英語を使う必然性のある場面設定の模索

中学校の教科英語との連携の在り方

4 具体的な実践

(1) 指導計画

実施学年	6 年	指導時期	1 2 月上旬
題材名	ルーツをさぐれ		
指導目標	食べ物等の原産地や日本に伝わった時代について対話し，食べ物マップ等を完成させる活動を通して，Where is ~ from? It is from ~. When did ~ come to Japan? In the Heian period.等の英語表現に慣れ親しみ，相手の話す内容について確認しながら聞いたり，絵やジェスチャー，既習の英語表現を使って，聞き手に伝わるように話したりする態度を育てる。		
主に扱う語彙や表現	<p>Where are/ is ~ from? It is from ~./ They are from ~. When did it come to Japan? In the Heian period.</p> <p>* Special story で児童が使うと予想される話し方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史人物 likes ~. ・ ~ is(was) medicine. 「medicine」の表現を知らないため，「I'm sick. I eat. I'm fine!」(既習の簡単な英語表現を使って) ・ 種を食べていた。 「not eat this (簡単な絵を描いて指し示しながら) eat ~ seed」 ・ 食べずに見ていた。 「Not eat. Only see. It's beautiful!」(ジェスチャーをしながら) ・ 昔と現在の色が違う 「Long ago, carrot's color is white, now carrot's color is orange.」(色の単語を使って) 		
教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食べ物シール (マップにはるシール) ・ ルーツをまとめるマップ (どの国から来たかを記入できる世界地図と日本に来た時代を記入できる年表が一枚にまとめられているマップ) ・ インタビューシート ・ コメントシート 		

評価の観点	評価規準 (実現したい具体的な姿)
言語や文化についての 気付きや体験的な理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食べ物のルーツが分かり，フードマップを作ることができる。 ・ 日本は長い歴史の中で，様々な国とのかかわりがあることに気付く。 ・ 歴史への興味や関心を深める。
英語による積極的なコミュニケーションの態度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵やジェスチャー，今までに習った英語を使って のルーツやスペシャルストーリーを伝える。 ・ 友達の話を確認したり，問い返したりして聞く。 ・ 分からない表現等があっても類推しながら聞く。
音声や基本的な表現への 慣れ親しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・ Where ~ ? When ~ ? を使って話す。

単元指導計画

時間	目指す姿	主な活動内容	主に扱う語彙や表現	言語と文化 コミュニケーションの態度 音声や基本的な表現への慣れ親しみ
1	ALT や HRT の話を聞きながら、主に扱う語彙や表現に慣れ親しむ。また、野菜の原産地や日本に伝わった時代を聞く活動を通して、話される内容について確認したり、問い返したりしながら聞く態度を育てる。	先生から食べ物の話を聞いて、フードマップを作り、気付いたことを交流する。また、メモを取りながら ALT や HRT の野菜のルーツにかかわる話を聞き、英語表現に慣れ親しむ。	What vegetable do you have? Taroos. Where are taroes from? Taroos are from India. I see. When did taroes come to Japan? In the Joumon period.	WH の疑問文の特徴や野菜のルーツに気付きや理解があったか。 野菜のルーツやスペシャルストーリーを確認したり、問い返したりして聞いていたか。 Where ~ ? When ~ ? の表現の含まれる ALT や HRT の話を注意深く聞いていたか。
2	いろいろな野菜の原産地や日本にきた時代を交流する活動を通して、主に扱う語彙や表現に慣れ親しむ。また、絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話す態度を育てる。	自分たちで野菜のルーツを交流し、フードマップを作り、気付いたことを交流する。	What vegetable do you have? Beans. Where are beans from? Beans came from Africa. I see. When did beans come to Japan? In the Nara period, 1200 years ago.	野菜のルーツについての気付きがあったか。 絵やジェスチャー、既習表現を使ってスペシャルストーリーを聞き手に伝わるように話していたか。 Where ~ ? When ~ ? を使って野菜のルーツを話していたか。
3	いろいろな食べ物がどの国から来て、いつの時代にきたのかを交流する活動を通して、主に扱う語彙や表現に慣れ親しむ。絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話す態度を育てる。また、話される内容について確認したり、問い返したりして聞く態度を育てる。	いろいろな食べ物のルーツを交流し、フードマップを作り、気付いたことを交流する。また、担当の食べ物のルーツを、グループ内でどう伝えるかを考える。	What food do you have? Udon noodles. Where are Udon noodles from? It is(They are) from China. I see. When did udon noodles come to Japan? In the Nara period.	be 動詞の特徴や食べ物のルーツについての気付きや理解があったか。 基本表現、絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるようにスペシャルストーリーを話していたか。 確認したり、問い返したりして聞いていたか。 Where ~ ? When ~ ? を使っていろいろな食べ物のルーツを話していたか。
4	いろいろな食べ物がどの国から来て、いつの時代にきたのかを交流する活動を通して、主に扱う語彙や表現に慣れ親しむ。絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話す態度を育てる。また、話される内容について確認したり、問い返したりして聞く態度を育てる。	いろいろな食べ物のルーツを交流し、フードマップを作り、気付いたことを交流する。また、担当の食べ物のルーツを、グループ内でどう伝えるかを考える。	What food do you have? Umeboshi. Where is umeboshi from? It is from China. I see. When did it come to Japan? In the Nara period. Next special story. I'm sick, I have umeboshi. So I'm fine! Is an umeboshi medicine? That's right!!	いろいろな食べ物のルーツについての気付きや理解があったか。 基本表現、絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手にスペシャルストーリーを伝わるように話していたか。 確認したり、問い返したりして聞いていたか。 Where ~ ? When ~ ? を使っていろいろな食べ物のルーツを話していたか。

5	<p>様々なものがどの国から、いつの時代に来たのかを交流する活動を通して、主な語彙や表現に慣れ親しむ。絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話す態度を育てる。また、話される内容について確認したり、問い返したりして聞く態度を育てる。</p>	<p>20種類の中から探るルーツを分担し、国名・時代・special storyについて読み取りながら、どの様に伝えるかをペアで相談する。また、実際に交流してみる。</p>	<p>What's your category? It's everyday things. What do you have? I have chalk. Where is chalk from? It is from the United Kingdom. I see. When did it come to Japan? In the Meiji period. What is chalk's special story? Long, long ago, chalk was limestone. This is the lime rock. (絵を使いながら) We can draw a white line with it. (ジェスチャーで「書く」真似をしながら)</p>	<p>調べたもののルーツについての気付きや理解があったか。 絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話していたか。 確認したり、問い返したりして聞いていたか。 Where ~? When ~? を使っていろいろな食べ物のルーツを話していたか。</p>
6	<p>自分が知りたいテーマに沿って、様々なものがどの国から、いつの時代に来たのかを交流する活動を通して、確認したり、問い返したりして聞く態度を育てる。また、担当したもののルーツを基本表現だけでなく、絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話す態度を育てる。(本時)</p>	<p>自分が知りたい「もの」のルーツを交流し、オリジナルのマップを作り、気付いたことを交流する。</p>	<p>What's your category? It's food. What food do you have? I have ice cream. Where is ice cream from? It is from China. I see. When did ice cream come to Japan? In the Meiji period. What is ice cream's special story? Do you know Fukuzawa Yukichi and Katsu Kaishu? First time Fukuzawa and Katsu ate ice cream in America. (「日本人で初めて食べた人」を Japanese, first 等の既習内容の簡単な表現や単語を使って話す。)</p>	<p>調べたもののルーツについての気付きや理解があったか。 絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように話していたか。 確認したり、問い返したりして聞いていたか。 Where ~? When ~? を使っていろいろな食べ物のルーツを話していたか。</p>

(2) 本時の授業について
教科指導とのかかわり
社会科の目標:

「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」

第6学年の目標:

「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」

上記の様に平成20年度に公示された学習指導要領について第6学年では、第5学年の学習を基に国家・社会の発展に大きな働きをした先人にかかわる内容の理解を深めるとある。これは、自分たちには馴染みの薄い内容である。また、歴史学習は、第5学年までの内容である産業や国土の学習と比べると身近な内容ではない。これらのことから、歴史学習では、会ったことも、見たこともない歴史上の人物や文化遺産等の名前の理解を深めることになるので、学習が進むにつれて「覚えることが多くて大変」「覚える学習でつまらない」という児童が増えるのではないかと考えている。実際に、4月の時点で、児童に「歴史の学習をどう思うか」と尋ねたところ、歴史に興味をもっている児童が多くいる一方で、中には「覚えるのが大変そう」という不安なイメージをもっている児童もいた。

歴史学習を進めるにあたって、弥生時代に稲作が中国から伝わったことや貴族や武士の食生活に触れた時に、多くの児童がとても興味深そうに学習に取り組む姿が見られた。

そこで、本題材では、日常生活に馴染みの深い食べ物をかかわらせることによって、歴史上の人物や出来事を身近に感じることにつながり、たとえわずかでも歴史への抵抗感が少なくなったり、食べ物への見方が変わったり幅が広がったりするのではないかと考えた。そして、自分たちが普段食べているものの中には、実は外国から伝わっているものがあるということや伝わって来るまでに長い時間があったということ、そして、様々な時代背景や人々の生き方がかかわって、今日の食生活に結びついているということを知ることにつながり、歴史への理解や関心が高められると考えた。また、食べ物の他にスポーツや遊び、日用品についての話題を扱うことで、興味や関心の持続ができ、気付きや驚きの幅が広がるのではないかと考えた。

児童の実態

学年の目標 互いの気持ちや考えを英語で伝え合う活動を通して、コミュニケーションを図ることの楽しさを味わうことができる。

上記の学年部の目標を受けて、本題材で目指す児童の姿を次のように設定した。

目指す児童の姿

- ・相手が伝えようとする内容を共感的に理解したり、自分の気持ちや考えをはっきりと伝えようとしたりする。
- ・理解できた言葉や身振り等を手がかりにしながら聞く。
- ・話される内容について自分の考えをもちながら聞く。
- ・自信をもって話す。

多くの児童は、英語活動が楽しいと感じているようである。また、「英語をたくさん話そうになりたい」「読めるようになりたい」「書けるようになりたい」という英語に対する興味・関心が高い児童も多い。しかし、一方では、難しいと感じた英語表現を話す場面や人前で話す場面では、みんなの前で英語を話すことにやや抵抗を感じている児童も見られる。

5月からの英語活動では、修学旅行に向けて「奈良公園でインタビューしよう」の題材を扱った。修学旅行の際に、自己紹介や出身地等をたずねる基本表現を土台に、これまでの既習表現をグループで自由に使って、外国の旅行者に奈良の文化遺産や日本・岐阜県の有名なもの等を紹介したり、質問したりするという活動に取り組んだ。始めは、相手にうまく伝わるかどうか自信が無く、意欲的に取り組む児童が少なかったが、練習を積み重ねたり、自分たちが調べたものや知

っている身近なものをクイズにして伝えるという special questions を加えたりすることで、目的意識が生まれ積極的に取り組む児童が増えた。また、自分たちでポスターを描いたりジェスチャーをしたりなどの工夫を取り入れることで、さらに長い英語を話すことに挑戦してみようとする児童が増えた。

11月の「どこへ行きたい？世界編」では、担当した国の特産物や観光名所を調べ、名称を伝えるだけではなく、自分が調べた情報を special story として聞き手に伝えるという活動も行った。名称は聞いて知ってはいたが、この活動でその特徴を詳しく知ることができたことに喜びを感じる児童もいた。更に、今までに習った英語の表現や単語をこの活動でも使えるという体験を通して、一人一人の話す内容の幅が広がり、より楽しさも増したように感じている。

こうした児童の実態を踏まえ、本題材では、これまでの積み重ねから、“Where is ~ from?” “When did ~ come to Japan?” などの基本となる疑問文を中心とし、さらに自分達で調べてまとめた食べ物に関する豆知識（special story）をグループで相談して工夫しながら話すという場面を設定した。食べ物の原産地や日本に伝わった時代を伝え合うだけではなく、その食べ物に関する豆知識を知ることによって驚きやおもしろさを感じたり、聞き手に自分なりの工夫で伝えることができたという達成感や充実感を味わえたりする活動にしたいと考えた。そして、この活動を通して児童の食べ物の見方や歴史に対する考え方の幅が広がることを願っている。

学年のつながり

ア 内容（社会科としてかわる題材は以下の通り）

学年	教科	カテゴリ	題材	内容
3年	社会	地理	「いろいろな地図記号」	地図を作る。
4年	社会	地理	「道案内をしよう」	道案内をして地図を作る。
5年	社会	地理	「世界を知ろう」	8カ国の代表的な物を3ヒントクイズで交流する。
5年	社会	料理	「お米で世界を感じよう」	世界の米の特徴をアピールする。
6年	社会	日常	「ルーツを探れ」	様々なもののルーツをインタビューし合う。
6年	社会	地理	「どこへ行きたい？（日本編）」	ツアーコンダクターとして自分の担当する県についてアピールする。
6年	社会	地理	「どこへ行きたい？（世界編）」	ツアーコンダクターとして自分の担当する国についてアピールする。
中1年	社会	地理	「世界の国々を紹介し合おう」	描いた顔を使って劇をする。
中1年	社会	地理	「都道府県の特徴を探ろう」	国の魅力を伝える。
中2年	社会	地理	「アメリカの特徴を知ろう」	アメリカで住みたい所を話し合う。
中2年	社会	地理	「岐阜県の特徴を調べよう」	県内の市町村の人口を調べる。
中3年	社会	地理	「オーストラリアの特徴を探ろう」	豪州の行きたい所を話し合う。
中3年	社会	地理	「未知なる友好国～アイルランド～」	アイルランド紹介のCMを作る。

イ 主に扱う表現

学年	教科	カテゴリ	題材名	主に扱う表現
4年	社会	地理	「地図を見てみよう」	Where is ~? It's ~.
4年	図工	工作	「ビュンビュンごまを作ろう」	What color can you see ~?
5年	音楽	音楽	「世界の音楽」	Where is this song from?
6年	社会	日常	「食べ物のルーツを探れ」	Where is ~ from?
中1年	音楽	音楽	「音楽家になりきって自己紹介しよう」	I am from ~. I like ~.

* 中学校の内容は、昨年度までの情報に基づいて作成

研究の視点にかかわっての具体的な手だて

ア 問題解決的な内容

- ・ 自分の担当した話題以外のルーツは知らないので、他の児童に聞かなければワークシートは完成できないという場面を設定した。
- ・ 原産地や国だけでなく、special story を聞く必要があるような活動の設定をした。
- ・ 自分たちにとって身近なものが、外国から伝わってきたものであることや、日本人が考案したものであるという驚きや意外性があることで、児童の意欲や興味を持続することができた。

イ 英語に慣れ親しみながら、楽しいコミュニケーション

- ・ 本単元は、計 6 時間でできている。慣れ親しむ表現についてはどの時間においても扱うが、活動で取り上げる英語の材料を毎時間、野菜 食べ物 スポーツや日用品等に変えていくことで、児童が飽きずに基本的な表現に慣れ親しむことができるようにした。
- ・ ペアで同じ話題を担当することで、協力したり助け合ったりしながら進められるように活動を仕組んだ。
- ・ どの児童も必ず 2 つは英語が話せるように、基本的な表現を 2 つ入れた。
- ・ special story では、うまく英語が話せなくても、絵やジェスチャー等の方法を教え、その児童なりの工夫した方法で活動に参加できるようにした。そのために、第 1 時から ALT や HRT が意図的に児童の前で話したりやってみたり、学級で考えさせたりする場を設けたりして児童が多様な方法で表現できるようにした。

ウ 児童の実態を踏まえた適切な教材・教具、指導方法の工夫

- ・ フードマップを作っていくことで、学習の足跡が一目で分かり、達成感を味わうようにした。
- ・ 児童が今までに習った英語表現で話したり聞いたりして分かるような豆知識がある食べ物を扱った。
- ・ この単元の終末までは食品に限らず、児童の身近なもの（例：スポーツや遊び等）に素材を広げて、より興味をもてるようにした。

エ 聞く側の目的意識

- ・ 第 6 学年の前題材の E 学習の活動形態は、課題を達成するために、相手のいない話し手を見つけてはそこへ移動して聞くことが多かった。しかし、本題材では、自分が聞きたいと思うテーマを数種類から 1 つ選ぶことによって、児童の目的意識が高まりことを期待した。

オ より英語らしいやりとりを求めて

- ・ 英会話の中では、時代名だけではなく、具体的な数字で示す必要があるという。（ALT の話より）そこで、より英語らしくするために、徐々に years ago という表現を扱うようにした。児童達が苦手とする数字の単語を聞いたり話したりすることに少しでも慣れ、時代がどれほど昔なのかも感覚的にでも感じてくれることを願っている。

本時のねらい

自分が知りたいテーマに沿って、様々なものがいつの時代に、どこの国から来たのかを交流する活動を通して、確認したり、問い返したりして「聞く態度」を育てる。また担当したもののルーツを基本表現だけでなく、絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って聞き手に伝わるように「話す態度」を育てる。

過程	主な活動		評価, 指導・援助
	児童	教師(HRT・ALT)	
・ Greetings	<ul style="list-style-type: none"> ・ Let's enjoy English! ・ HRT や ALT のやりとりを通して、本時で扱う英語表現や会話の流れを思い出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日にちや曜日、気分や天気をたずねる。 ・ HRT は、児童が Activities の活動で取り入れてできそうな方法でやりとりをする。絵やジェスチャーを交えながら ALT の質問に答える。ALT は、本時で扱う英語表現を交えながら児童達にたずねる。 	<p>大きな声であいさつできたか。</p> <p>教師のやりとりを興味をもって聞き、本時で扱う英語表現を思い出すことができたか。</p> <p>Where ～? When? の基本表現、「もの」の言い方や国名を確認する。</p> <p>課題の紙、ワークシート</p> <p>児童が説明するときに使うことのできる用紙</p>
・ Activities	<p>本時のめあて</p> <p>自分が知りたい「もの」のルーツを探り、オリジナルの マップを作ろう。</p>		
	<p>(聞き手) 確認したり問い返したりして聞く</p> <p>(話し手) 絵やジェスチャー、既習の英語表現を使って話す</p>		
・ Comments	<p>ペアで担当したもののルーツの交流を練習する。</p> <p>取り上げるものは、計 20 種類</p> <p>ペアで出題者とインタビュー側に分かれ、交流をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で選んだテーマのルーツを聞きに行く。 ・ 聞いた情報をワークシートにメモする。 ・ 出題者とインタビュー側の役割を途中で交代する。 <p>C1: What's your category? C2: It's food. C1: What food do you have? C2: I have ice cream. C1: Where is ice cream from? C2: It is from China. C1: I see. When did ice cream come to Japan? C2: In the Meiji period. C1: What is ice cream's special story? C2: Do you know Fukuzawa Yukichi and Katsu Kaishu? First time Fukuzawa and Katsu ate ice cream in America.</p> <p>ワークシートをもとに、インタビュー内容を世界地図にまとめ、テーマごとに気付いたことを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の振り返りをする。 ・ 明治時代には、外国からたくさんのものが伝わってきたのだなあ。 ・ 日本は、外国とのつながりが長い間あったのだな。 ・ ALT, HRT のコメントを聞く。 ・ あいさつをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ HRT と ALT で半分のグループをそれぞれ担当し、児童の練習を見る。 ・ HRT と ALT で半分のグループの交流を見届け、アドバイスをしたりほめたりしながら支援していく。 ・ 前半と後半が変わる時に、全体の前で前半の振り返りをし、聞き手を中心にアドバイスをしていく。 <p>HRT は</p> <ul style="list-style-type: none"> * うなずき、リピート等の反応をしていたか。 * 分からない時は、繰り返しを求めたり What's ～? などの質問をしたりして分かるまで聞いていたか。ALT は、* Where ～? When ～? を使っていたか。 * 聞き手の反応を見て、絵やジェスチャー、今までに習った表現を使ってより分かりやすく伝えようとしていたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ HRT は、歴史上の人物に興味や関心をもった姿や、日本は外国とのつながりがたくさんあるのだという児童の気づきを認める。 ・ ALT は、絵やジェスチャー、既習表現を使って話をしていく様子(具体的な表現も交えて)を紹介しながら認める。 ・ あいさつをする。 	<p>交流したことを記入できるようになっている世界地図</p> <p>ポイントを大切にしながら話している姿や自分たちで工夫しながら伝えようとしている姿をほめ、自信をもたせる。</p> <p>インタビュー側になった時の児童が困りそうな難しい表現や単語を、どう説明するとよいかを絵やジェスチャー、知っている表現を使って伝えられるようにアドバイスとして教える。</p> <p>基本となる英語表現や既習表現、絵やジェスチャー等を使って聞き手に伝わるように話していたか。</p> <p>話される内容について確認したり、問い返したりして聞いていたか。</p> <p>テーマごとに完成した巨大マップと年表、評価カード</p> <p>自己評価ができたか。</p> <p>調べたもののルーツについての気づきがあったか。</p> <p>友達や先生のコメントをしっかりと聞いたか。</p>
・ Greetings	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本は、外国とのつながりが長い間あったのだな。 ・ ALT, HRT のコメントを聞く。 ・ あいさつをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ HRT は、歴史上の人物に興味や関心をもった姿や、日本は外国とのつながりがたくさんあるのだという児童の気づきを認める。 ・ ALT は、絵やジェスチャー、既習表現を使って話をしていく様子(具体的な表現も交えて)を紹介しながら認める。 ・ あいさつをする。 	<p>大きな声であいさつできたか。</p> <p>教師のやりとりを興味をもって聞き、本時で扱う英語表現を思い出すことができたか。</p> <p>Where ～? When? の基本表現、「もの」の言い方や国名を確認する。</p> <p>課題の紙、ワークシート</p> <p>児童が説明するときに使うことのできる用紙</p>

5 実践の検証と中学校の英語教育との連携や関連

(1) 実践の検証

授業の成果として

- ・題材を変えながら繰り返し活動する中で、活動に慣れさせ、メインとなる表現に自然に親しませていく単元指導構想の在り方に工夫が見られる。
- ・単にクイズの素材として「歴史」を取り上げるのではなく、この活動を通して感じる「驚き」や「意外性」を通じて「歴史」を自分に引き寄せて考える児童に育成したいという「教科の本質」に触れる題材への共通理解が図られている。
- ・「話したい」「聞きたい」必然性を生み出すための‘Special Story’の設定は効果的である。
特に本時では、‘Picture Story’の内容に驚きがあることから「話したい」「聞きたい」という気持ちを高めることができた。そのため、既習表現を駆使して「何とか伝えよう」という思いをもつ児童が多く育っている。
- ・学ぶ環境として常に英語に触れる環境があることは、普段から児童の外国語活動に対するモチベーションを高めることにつながる。教師が準備した資料や掲示物が、児童の学ぶ意欲に結びついている。(E環境)
- ・英語を学ぶのではなく、情報を伝えるために英語を使用している授業であり、相手に何とかして伝えたいという思いから、ジェスチャーや絵の指し示しを自然に使用している姿が見られた。自信がなくても片言でも、勇気をもって話そうとする姿勢が育っている。

今後の授業改善のために

- ・「英語を書く」ための意図的な仕組みとして一つの質問をして、すぐにメモする活動を仕組んだが、コミュニケーションの自然さが損なわれ、活動が停滞してしまった。高学年では、目的をもって、ある程度、まとまった情報を聞き、その情報から、何かを総合的に判断するような活動が求められるのではないかと考える。
- ・授業者は、「マップを完成させる」というタスクに、コミュニケーションの必然を求めたが、最も伝えたい内容と、マップの完成が結びつかず、うまく機能しなかった。
- ・授業のまとめで、授業者は児童に、完成したマップを示して What do you think about this map? と内容にかかわる気付きや驚きを引き出す意図的な問いかけをしたが、児童の反応は乏しく、実際のマップから驚きや感動が生まれる情報が得られなかったことが原因であると考えられる。
また授業の課題は、マップの完成であったため、完成したマップから何かを感じたり、何かを導き出したりするまでの児童の課題意識の問題があり、マップを完成させることの目的を明確にして、それを課題化することの必要性を感じた。また、内容にかかわっては多くの気付きが見られ、社会科の本質にもかかわっていた。しかしながら、児童が本当に伝えたいことや児童の驚きや発見については十分ではなかった。
- ・英語表現に対応するリズム指導については効果的であった。英語らしいリズムを学ぶとともに、英語により日本語の響きの美しさも再認識することにつながる。
- ・児童が正しい英語、知りたい英語があったときに、ALTに尋ねることができるような時間も保障することで、活動意欲がさらに高まると考える。

(2) 中学校の英語教育との関連

笠原小学校では笠原型コンテンツ・ベイストを用いて英語活動を継続することにより、児童に以下のような力を付けていると考えている。

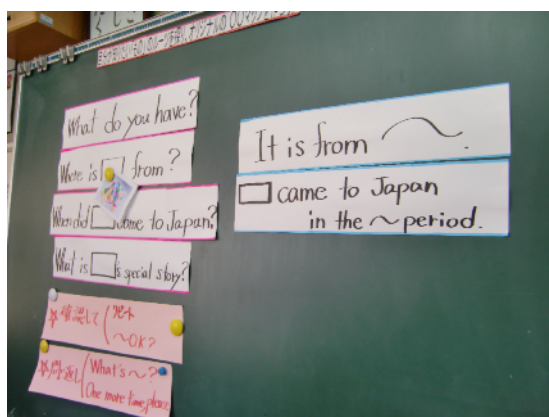
- 1 英語を使うときの表情：英語を介したやり取りの際の表情が柔らくなる。
- 2 発する音の英語らしさ：英語らしい発音やリズムに対する抵抗が少なくなる。
- 3 ゆとりのある英語使用：より自然に英語を使ってやり取りを楽しむようになる。
- 4 場にあった自然な身のこなし：必要な時に効果的にジェスチャーやあいづちをするようになる。
- 5 類推慣れ：少ない情報を手立てに、意味を理解しようとするようになる。
- 6 聞き続ける力：多少分からないからといった場面でも、あきらめなくて聞いていこうとするようになる。
- 7 他者理解：だれにでも気軽に英語で話しかけたり、相手のことを聞こうとしたりするようになる。
- 8 分かってもらおうとする力：伝えたいことを相手になんとかして伝えようとする。
(「単語だけでもいいから」や「ジェスチャーや絵を描いて伝える」など)
- 9 英語を読む力：初めて見る英単語や英文でも、なんとなく発音することができる。

実際に中学校の英語教育への接続という点において次のような実態が見られた。

- 1 中1の始めから All English の授業を違和感なく行うことができる。
- 2 学期・学年卒を越えた語彙や表現を与えることができる。
- 3 実践的な言語活動を早期に仕組むことができる。
- 4 その場に応じた基本的な表現を即興的な場面で活用しやすい。
- 5 小学校英語活動とのつながりを考え、スパイラル的な学習を意識するようになった。
- 6 リスニング問題の作成において様々な語彙を取り入れることができる。
- 7 インタビューテストは「聞く・話す」を中心に行った。

参考HP資料：[ぼーぐなん](#)

6 資料



本単元で使用する表現を分かりやすく提示します。



ローマ字の読みから英語の文字への発展を考えます。



絵を用いながら分かりやすく相手に伝える工夫をします。



他教科(社会科)で学んだ内容と重ねています。